

蔡培火『東亜の子かく思ふ』に関する一考察

——ある日本統治期台湾知識人の愛国思想——

嶋田 聡

はじめに

蔡培火 (1889-1983) は、日本統治時代は台湾文化協会の中心メンバーの一人として台湾議會設置請願運動や台湾語 (閩南語)⁽¹⁾ローマ字表記運動等に携わり、戦後は台湾立法委員や行政院政務委員を務めるなど、生涯をかけて台湾の文化や内政改革に取り組んだ人であり、また熱心なキリスト教徒としても知られている。本論は、そのような一人の知識人・政治家である蔡培火が1937年に発表した長篇論文『東亜の子かく思ふ』についての考察である。

この1937年という年は盧溝橋事件 (7月7日) を発端として日中全面戦争へと突入していく東アジア史における一大転換点にあたり、本論で取り上げる『東亜の子かく思ふ』もそうした時代の切羽詰まった状況の中で書かれたものである。本書の本文末尾には著者自身による「昭和十二年、一九三七年五月三十一日燈下、希望に燃えて擱筆」⁽²⁾という末筆文が付けられており、本書の初版が発行されたのは盧溝橋事件からおよそ一週間後の7月15日である。したがって、本書の内容は日中戦争前夜の国際的な「危機」の分析や、日本帝国がその状況をどう乗り越えるか、さらには日本国民が主体となってどのようにして中国との衝突を回避して「日華親善」を打ち立てていくべきか、などについての提言が中心となっている。

本論では、まず本書を精読することにより、蔡培火が当時の日本帝国を取り巻く世界情勢をどのような観点から分析・批評しているのかを明らか

(1) 特別な表記がない場合は、「台湾語」とは閩南語のことを指すものとする。以下同様。

(2) 蔡培火 (1937)、232頁。

にし、「日華親善」の必要性を訴える一人の台湾人⁽³⁾の政治的立場をそこに見出す。次に、蔡のいう「東亜」とは何を指すのかということ、日本と中国を中心とする地域間の「同文同種」や民族共和の視点から検討する。そして、最終的には蔡の主張する「日華親善」が非戦論を唱える一宗教者としての「愛国」的理想が語られたものとし、この「愛国」思想がどのような性格のものであるかについても検討する。

本論での考察を通して、日本統治期台湾における一台湾知識人の、台湾ナショナリズムや当時の左翼マルクス主義ではない、ある種の自由主義的立場からの時局批判や体制批判の視角が存在していたことを明らかにする。

I 蔡培火の略歴とその思想

蔡家の一族は清末に中国福建省泉州から台湾の雲林北港に移住してきたのであり、培火の父親である蔡然芳は著名な学者であった。1889年（光緒15年）、蔡培火はこの北港に生まれた。字は峰山⁽⁴⁾。

蔡培火は13歳の時、長兄から当時台湾でキリスト教の伝道に用いられていたローマ字を教わり、以後ローマ字を介して日本語や漢文を独習して17歳の時に台湾総督府国語学校師範部に入学、1909年3月に同校を卒業後は台南で公学校の訓導として教鞭をとることになり、23歳の時に台湾人の呉足という女性と結婚した。

1914年3月に板垣退助が台湾で同化思想を提唱し、12月に台湾同化会が成立すると蔡培火もその思想に共鳴し、即座に運動に加わった。台湾同化会は幹部になった林献堂が中心となって日本政府要人に働きかけて実現したものであり、台湾島民と在台日本人との平等を促すことを目的とするものであった。日本側の代表を務めた板垣退助は台湾を日中両国の掛け橋にしたいと考え、在台日本人と台湾島民の和睦を唱えるとともに、台湾人

(3) 本論では特別な註釈がない場合、「台湾人」とは当時の台湾に住んでいた漢族系および原住民系の住民のことを指すものとする。

(4) 本章の本人略歴等については、おもに吉田荘人（1993）と中島利郎（2005）を参照している。以下同様。

を介しての日中親善の促進を切望したのである。板垣のこの考えは林猷堂や蔡培火らによって継承され、後に成立する台湾文化協会の成立趣旨にも反映されることになる。

この同化会において蔡培火は、台湾島民の知識水準を高めるためにはローマ字を新聞や雑誌を通じて普及させるべきだと提言している。しかし、同化会が台南で講演会を開いた時、演壇に立った蔡培火は警察から警告を受けた。そして1915年1月26日、当局は公共の秩序を害するという理由で同化会に対して解散を命じ、板垣退助は東京に戻ることを余儀なくされ、総督府は同化会に関わった公務員を強制的に辞職させ、蔡培火も公学校の教員を免職になった。

その後1915年2月に、蔡培火は林猷堂から学資の援助を受けて日本内地に留学し、予備校で1年間学んだ後、東京高等師範学校理科二部（物理化学科）に入学、在学中にキリスト教に入信し、1920年2月の卒業と同時に洗礼を受けた。蔡はこの期間中に教会を起点にして中国からの留学生や日本人の信徒との交流を深め、牧師・植村正久の紹介で知り合った衆議院議員・田川大吉郎や尾崎行雄ら革新派の政治家からも政治的な支援を求め、台湾人の同志とも協力しながら台湾の政治問題と社会改革の方針について研究するようになる。そして、他の台湾人留学生らと「啓発会」（1919年）、次いで「新民会」（1920年）を結成し、蔡自身が中心となって東京に台湾青年雑誌社を設立して月刊誌『台湾青年』を編集発行した。

その創刊号には台湾総督・田健治郎からの題辞のほか、東京帝国大学教授・吉野作造、明治大学学長・木下友三郎、男爵・阪谷芳郎などからも激励文が寄せられた。また、蔡培火自身の筆による「創刊の辞」には、「観よ。国際連盟の成立、民族自決の尊重、男女同権の実現、労資協調の運動等、一としてこの大覚醒の賜でないのではない。台湾の青年！ 高砂の健児！ 吾人は尚ほ立たないで居られやうか。（中略）吾人は深思熟考の末、遂にかく悟った。即ち広く内外の言論に耳を傾け、取るべきものを細大となく取り入れて我が養ひとする。而して養ひ得た力を惜げなく内外に向って尽すと云ふことは、正に吾人の理想で、勇進すべき目標である」⁽⁵⁾と述べら

(5) 吉田荘人（1993）、123頁からの孫引き。

れている。ここから分かるのは、蔡培火および「新民会」の思想が排外主義的ナショナリズムではなく、あくまで日本側の協力のもと、日台間における教育の機会均等などの民族の平等を実現し、台湾自らの発展につなげるという、総督府の専制支配に対抗するという意味での民族共和や自由主義的な発想にもとづいているということである。このような思想傾向は、やはり先に見た台湾同化会の思想が継承されたものと考えることができる。

この『台湾青年』は後に『台湾』（1922年4月～）と改称し、さらには1923年4月15日から台湾民報社発行の『台湾民報』に一元化され、1927年からは島内での発行が許可されると、1930年3月からは大東信託と業務提携して『台湾新民報』と改称し、1932年4月15日からは日刊新聞へと生まれ変わり、「台湾人唯一の言論機関」などと称されるほど影響力のある新聞メディアにまで発展したのである。

1921年10月、台湾文化協会が台北で成立し、蔡培火は蒋渭水とともに専務理事に指名された。ちなみに、この時同協会の「総理」に推されたのが林献堂である。この年から台湾総督府の専制支配に対抗する台湾議会設置請願運動が本格的に始まり、林献堂を中心として日本帝国議会へ請願書が提出されることになるのだが、総督府からの弾圧に遭い、一度大きな挫折を余儀なくされる。1923年、蔡培火は蒋渭水らとともに台湾議会期成同盟を作ろうと画策し、台北の警察署に結社を願い出たが却下され、仕方なく東京の牛込警察署に願い出たところ許可された。だが、このことが総督府の逆鱗に触れ、同年12月に総督府警察局によって49人が拘留され、うち蔡培火や蒋渭水を含む17人が投獄された。これは後に治警事件と呼ばれる出来事である。ただ、その後も台湾議会設置請願運動は続けられ、1934年8月に正式に断念することが決まるまで、合計15回にわたって継続された。

その後、台湾文化協会の左右による分裂を経て、蔡培火は蒋渭水とともに1927年7月に台湾民衆党を結成、1930年8月からは台湾地方自治連盟の発足から同連盟の幹部を務めるが、これが台湾民衆党の党規に触れるものとされ、蔡培火は同党から除名された。そして1931年、台湾文化協会と台湾民衆党が相次いで当局によって解散させられ、蔡が所属する台湾地

方自治連盟が唯一の政治結社となった。

日本軍による大陸侵略が進展するにつれて、総督府からの政治運動に対する弾圧が強まったので、蔡は家族とともに東京へ避難し、その後1942年には上海へと逃れている。日中戦争の終結直前には、蔡培火と田川大吉郎が戦争の平和的解決のために重慶国民政府へ談判に行くことになったが、その直前に日本の敗戦を迎えた。

戦後は、蔡培火は国民党の一員として台湾（中華民国）の立法委員、行政院政務委員などを歴任し、中華民国献血運動協会を創設するなどの社会活動にも携わった。また大陸では中国語のローマ字表記が始まり、台湾当局の命によりローマ字の使用が禁じられたため、蔡はそれまでの台湾語ローマ字表記の主張をあきらめ、代わりに注音符号を用いて『国語閩南語対照詞典』などを編纂した。1983年1月4日、94歳で永眠。

II 「愛国」と「親善」

1 東西文明論から見た「東亜」

では、ここからは『東亜の子かく思ふ』の内容について具体的に見ていく。はじめに、本書の表題にも使われている「東亜」の対象範囲と、その言葉が示す象徴的意味について考えてみたい。

蔡培火は本書の「緒言」の中で次のように述べている。

今日の日本は完全に東亜なる大家族の長兄となつたのだ。日本は先づ実力、武力に於いて東亜の長兄になりました。これからは何卒徳望に於いても従来以上により良き長兄となられんことを熱望致します。長兄に力あり、また徳も備へて始めて此の東亜の大家族が破滅から救はれます。⁽⁶⁾(下線引用者)

上記の文中には3回「東亜」という言葉が登場しており、そのどれもが「東亜」を「大家族」にたとえ、日本をその「長兄」とするという文脈に

(6) 蔡培火(1937)、17頁。本文の引用については、漢字の旧字体は新字体にあらため、旧かな使いはそのままにして表示するものとする。以下同様。

において使われている。したがって、ここでいう「東亜」というのは日本を内に含み、また日本とある種家族的な関係にある国々や地域の総称ということになる。そして、日本は「武力に於いて」その「長兄」になり、今後は「徳望に於いても」よりよい長兄になることを願うという文脈からは、この「東亜」という言葉が単に「アジアの東部」というだけでなく、そこに日本が立派な長兄として君臨すべき場所という意味としても使われていることが分かる。もちろん、本書は日本国民に「日華親善」の必要性を訴えることを趣旨として書かれたものなので、この「東亜」の範疇には中華民國も「家族の一員」として含まれている。

たとえば、日本と中国の関係については次のように表現される。

日本と中国とは人種的にも、文化的にもまた経済的にも兄弟の邦でありまして、それが兄弟互に親しまずして却つて札附の英国と親しみ、而して相互の怨を深める結果になつても省みないとは、全く思慮浅い極みではありませぬか。軍国的、帝國的暴威を印度で振つて居る英国は、正義と自由とを愛する人類共同の怨府であつて、義理人情の何れから考へても、日本も中国も共に将来何時か印度三億の隣人の為めに、その独立の声援をなすべき立場に在る筈であります。⁽⁷⁾(下線引用者)

これを見ると、まず日本と中国は「兄弟の邦」であるとされる。そして、イギリスの圧政に苦しめられているインドは「隣人」と表現されている。つまり、インドは東洋の国ではあっても「東亜」の「大家族」の範疇には含まれてはいないことになる。このように「東亜」の国や地域を一つの大家族にたとえ、台湾人である蔡培火はその「子」として自ら思うところを申し述べるというのが、本書の表題『東亜の子かく思ふ』の意味するところである。

さて、上記の引用文の中でも「英国は、正義と自由とを愛する人類共同の怨府」とあるように、とくにこの第二章「悪魔の祭壇に上る勿れ」においては、西洋の科学的文化生活やそこから発展してきた資本主義、帝国主

(7) 蔡培火 (1937)、36頁。

義等の思想に対する批判と、その魔の手から東洋を守らなければならないという主張が随所になされている。

たとえば、第二章第一節の末尾において「西洋諸民族は、殆ど完全にその科学的文化生活の虜となつたが、我々東洋諸民族は幸にも、尚ほその感化、害毒を受けること少なく、今の中になんとかすれば、まだ助かりさうに思ふのであります」⁽⁸⁾と述べられ、続く第二節では次のような主張が展開されている。

近代都市文明、科学的文化生活よ、汝は阿片の如く人類を荼毒し、世界を滅亡に導くべき悪魔の頭であります。左翼のマルクス主義も右翼の資本主義、帝国主義も、何れも汝の産みたる同腹の妖孽たるに過ぎませぬ。⁽⁹⁾

このようにして、蔡培火は左翼マルクス主義や資本主義、帝国主義をも科学的唯物論にもとづいた思想であるとして一刀両断に切り捨てる。こうした観点からの批判は、やはり蔡がキリスト教を信奉する宗教者であったことと密接な関係があるといえる⁽¹⁰⁾。

また、左翼マルクス主義との敵対に関しては、蔡培火自身過去に苦い経験があった。

本書の第四章「道は左になく右にも在ることなし」の第四節において、そのことが次のように述べられている。

我々お互が多かれ少なかれ、現今右翼的脅威を感じつゝあると同様に、大正の末期から昭和の初年頃まで、左翼的暴風に曝されたのであります。当時私自身も左翼分子から、暴力を以て見舞はれることだけはなかつたが、有らん限りの無実な中傷と誹謗、排斥と侮辱とを彼等より受けたのであります。否、それだけならまだよい。社会正義、国利民福に反した

(8) 蔡培火 (1937)、23 頁。

(9) 同前。

(10) 本章第一節において蔡は、「茲に於いて、現実執着者が現れ、宗教を阿片視する唯物論が横行し出す」と述べ、唯物論者を自らの宗教者としての立場に敵対する存在として位置づけている。蔡培火 (1937)、20-21 頁を参照。

特権諸勢力と抗争すべく、私共が折角永い間に苦心して組織した民衆の勢力、無理解な官憲や特権者達の力を以てしても攪乱し得なかつたその民衆の、左翼勢力の為め完全に根本から破壊されて了つた事は、呉々も遺憾に思ふ次第でありました。⁽¹¹⁾

この経験とはつまり、1926年から27年にかけての台湾文化協会の左右による分裂である。結果的に、台湾文化協会は後から入ってきた連温卿、王敏川、それに台湾無産青年会を中心とする左翼マルクス主義を標榜する一派に乗っ取られるかたちになり、1927年1月に会則を改正し、「大衆文化実現」をその綱領として組織の運動の方向性を無産階級運動へと転換したため、それまでの主流派だった林猷堂、蔡培火、蔣渭水らはやむなく脱退せざるを得なかつたのである⁽¹²⁾。

右翼的ファシズムの「脅威」にせよ左翼的マルクス主義の「暴風」にせよ、このような思想はすべて西洋を起源とするものであり、それゆえ蔡培火は東洋諸民族をその「害毒」の波及から守らなければならないと主張するのである。ただ、蔡は科学文化そのものについて否定したわけではなく、それはあくまで正しい宗教信念のもとではじめて発展され、享用されるべきものとしている⁽¹³⁾。

いずれにせよ、蔡培火から見た東洋人とは、西洋人に比べて「尚ほ素朴であり、単純であり、割合に善良で、科学的物質文明の悪弊に落込んでゐる事が少ない」⁽¹⁴⁾人々であるといえる。そのようなイメージは、当然東洋の一部分である「東亜」の諸民族にも当てはまるものである。つまり、ここで蔡は、戦争勃発前夜の現今の日中両国間においても、こうした「善良」さをもつ「東亜」の兄弟国同士であれば必ず親善は可能だということを、「科学的物質文明の悪弊」に毒された西洋との比較において示したかったのであるだろう。

(11) 蔡培火 (1937)、98頁。

(12) 矢内原忠雄 (1929)、245頁を参照。

(13) 蔡培火 (1937)、20頁を参照。

(14) 蔡培火 (1937)、18頁。

2 「愛国」的行動としての非戦論と「日華親善」

これまで述べてきた通り、本書『東亜の子かく思ふ』の執筆動機は、日中関係が現在の危機的状況を脱するために、日本側が主体となって「日華親善」を進める必要があることを読者に広くアピールするためであった。

こうした危機に対する認識は、文中では次のように表現されている。

中国は危い！ 日本は危い！ 我が東亜全体が危い！！ 我が東亜は真に危機に際会し、悪魔は我々をその祭壇に上さうとしてモザ／＼して居るやうに見えます。既に記した如く、精神的に西洋諸民族が自ら以て悶え来つたその科学的近代文化に、我々東洋民族の心も奥深くまで侵害されようとし、我が古風な素朴さを漸々と濁らされて、我々を一步步と彼等と同様の苦境、行詰りに誘つて行かうとして居ります。我々は茲に覚醒するところなくてはなりません。今から覚醒して我が先聖、先哲が我々に指示せられた、我が東方の光明の中に浸つて居れば、まだ救はれぬことは決してないと思ひます。⁽¹⁵⁾

噫！ 民国が危い、日本が危い、我が光出づる東方が危い！！ 神明、祖宗の靈に祈願するのだが、どうかこの危局を救つては下さらないでうか。現状の儘で行けば日華は必ず正面衝突を来す、必ず戦ふ。⁽¹⁶⁾

上記の文はどちらも第二章「悪魔の祭壇に上る勿れ」からの引用であるが、共通するのはこの危機的状況を打破できるのは「東方」の哲学や宗教などの「光明」や「光」だけであると主張しているところである。つまり、近代の「——主義」ではなく、東洋の哲学や古代から続く宗教的な心性などによってのみ、現下の世界を救えるのだというのである。

こうした主張は、第五章「光は常に東方より」の中でより端的になされている。

東亜の同胞よ、我々自ら好んで死蔭に居る勿れ、須く昂首進出して光

(15) 蔡培火 (1937)、38頁。

(16) 蔡培火 (1937)、46頁。

明の中に出でよ、光は常に我が東方より発射してゐます。我々先づこの光を浴びて光の子達とならうではないか。而して後、西方へもこの光を反映しませう。斯くして世界人類を、現在の暗黒より救出すべきであります。⁽¹⁷⁾

このように、蔡培火は単にこの「東亜」を西洋の「悪魔」の手から守ろうとするだけでなく、逆にこちらから西洋に向かって光を照らし、世界の人々を「現在の暗黒より救出すべき」と主張する。ただ、ここで一つの疑問が浮かんでくる。蔡自身が信仰するキリスト教はそもそも西洋からきたものであり、そのことを差し置いて、こうして東洋の優位性ばかりを主張するのは矛盾しているのではないか、という疑問である。

この点に関しては、蔡培火はまず「西洋諸国は殆ど皆基督教国であります。特別に信心深い崇高な人格者、精神家は在るには在ります。且つ我が東洋人に比べて此の部類のものは、現在数に於いても多く、行動に於いても更に積極的で立派であります」⁽¹⁸⁾と一応は述べつつも、次の段落においては自ら下記のように反論する。

ところが、実際の趨勢は如何。大いに深憂すべき事象が、我々の眼前に刻々展開しつつあるではないか。過去に於いて、既に西方民族の資本主義、帝国主義、軍国主義の為に、我が東方民族は随分酷く蹂躪せられ、日本は幸にその植民地とならなかつたが、中国はその半植民地の状態、印度支那、印度その他は完全なる植民地となりました。(中略) 彼等(西洋人：引用者)は基督教に純化せられたよりも、科学的文化生活に毒せられた方が深い。その方の害毒が幾倍にも広く行き渡つてゐる。彼等はその飽くことなき感官的欲求の充足の為め、何うしてもその不足を我が東方に向かつて求めて来て已まないのであります。⁽¹⁹⁾(下線引用者)

(17) 蔡培火 (1937)、152頁。

(18) 蔡培火 (1937)、25-26頁。

(19) 蔡培火 (1937)、26-27頁。

確かに蔡のいう通り、この1937年当時、すでに世界では多数の戦死者を出した第一次世界大戦などさまざまな「暗黒」の歴史が繰り返されてきており、それらのほとんどすべてが西洋の「資本主義」、「帝国主義」、「軍国主義」等に端を発するものであった。そして蔡によれば、それは西洋の人々が「基督教に純化」されるよりも「科学的文化生活に毒せられた」結果であるというのだ。

こうした見方をするならば、日本帝国による植民地的搾取や大陸への侵略なども、これまで見てきた西洋の「悪」に染まった結果であるということが出来る。当局の検閲を恐れたためか、本書の文中でははっきりとそのように述べられているわけではない⁽²⁰⁾が、全体の論理構成からいえばそういう結論になる。

では、現今の危機的状況の中で、日中両国はいかにして「親善」を推し進めるべきなのであろうか。続いて本書の第六章「日華親善は世界平和の端緒」を見ていくことにする。

この中で蔡培火は、まず両国の関係について次のように述べる。

日本と中国との関係は、誠に同文同種、唇齒輔車の間柄でありまして、国家としてお互は独立した別々の存在であるけれども、地理的にも、人種的にも、文化的にも、また経済的にも、真に不可分の関係にあります。これらの関係こそ、根本的のものであって、日華親善を運命づけるものであります。⁽²¹⁾(下線引用者)

つまり、「地理」、「人種」、「文化」、「経済」どの観点から見ても日本と中国は密接不可分の関係にあり、したがって「日華親善」は両国にとっては運命のようなものだという主張である。

また、この「日華親善」を世界的な視野で見た場合の重要性については、次のように説明している。

同文同種であるから、所謂「大同小異」の関係にあります。然るに小

(20) 現今の日本による大陸への侵略については、本書の文中では直接的には触れられていない。

(21) 蔡培火(1937)、167頁。

異を捨てずして大同を失はしめるのは、愚かの極みと謂はねばなりませぬ。特に今後国際競争の激烈たるべき傾向に鑑みて、如何に日華親善が必要であり、必然であるかを知るべきであります。中日親善して、而して両方共同一致して、多くの我が東亜の被圧迫民族の為に、自由平等を世界列強に対して主唱する時、両国の世界的地位は、英米のそれを凌駕すること数等たるべきを確信します。⁽²²⁾ (下線引用者)

まず、前半部分の「国際競争」を考えた場合の「日華親善」の必要性というのは、当時の日本が置かれていた孤立した国際環境を考慮してのものである。そして、後半の下線部分の「中日親善して」「共同一致して」「多くの我が東亜の被圧迫民族の為に、自由平等を世界列強に対して主唱する」というのは、蔡培火が一宗教者としてこれまでもおもに台湾で取り組んできたし、これからも日中両国の要人に自ら働きかけて実現していこうとすることであるといえる。なぜなら、蔡自身が「東亜の被圧迫民族」の一つである台湾人だからである。

また、蔡培火は中国において日本語学習熱が高まっているのに日本では中国語の研究が奨励されないことを憂い、当年4月1日から台湾島内の新聞紙面からいっさいの漢文を排除するという暴挙に出た当局の政策に対しては、「斯る仕草は、威を示すに充分であり、徳を失するにも充分であるが、政策的成功を期するには僅かの実益さへも疑はしい」⁽²³⁾と激しい語調で批判を加えている。やはり、日中両国国民の「衆善外交」を主張する蔡にとっては、言語は非常に重要な要素だったといえるだろう。蔡はさらに、一般国民だけでなく宗教家や教育家の活躍についても大きな期待を寄せている。このあたりにも、蔡自身の宗教者としての一面がうかがわれるのである。

中でも、蔡培火は自らが唱える「日華親善」の一つに、日本にいる中国人学生に対して積極的に世話をしをてあげてことを提案し、さらにそれが「愛国」につながるのだとして、次のように述べる。

(22) 蔡培火 (1937)、167-168頁。

(23) 蔡培火 (1937)、177頁。

愛国といふことを、多くのものが甚だ狹隘に解して居ります。軍事行動とか税金完納等は、勿論愛国行為であるに相違ないけれども、斯くすることは毎日々々するのでなく、或る特定の時と特定の場合しか致しませぬ。特定の時と場合以外に愛国行為の必要がない、また愛国に相応しいこともないとしたならば、その国は大変なことになりませぬか。寧ろ平素日常の急公好義が、より大なる、より緊要な愛国ではありませぬか。日本内地の同胞よ、上來申し述べた鄙見に対して、幸にも御同感であられるならば、何卒、帝国目前の急務たる日華親善の一途に向つて、国内に居ながら、家業に励みながら、容易く実行し得るところの中国学生の世話を、皆様の愛国心の発現として、これから盛んに実行せられんことをお願いします。⁽²⁴⁾ (下線引用者)

ここでは蔡は、なぜ中国人学生の世話をすると「日華親善」に役立つかについては述べていないが、この引用段落の前頁の説明によれば、彼らが国へ帰るとみんな政府の高い役職につくから、今のうちに世話をしてあげていれば後々の外交親善に役立つということである。これは半ばユーモアを交えた提案であるともいえるが、「日華親善」に対する意識を広く一般国民に植えつけるために蔡が考え出した一つの方法だったのであろう。

最後に、ではなぜ「日華親善」が「愛国」へとつながるのかについて一言しておきたい。蔡培火にとって「祖国」とは、台湾や日本、さらには中国をも内に含んだある種の共和政体として理想化された「東亜」のことであったといえる。つまり、蔡における「愛国」の「国」とは、もしそれが日本を指しているならば、それはあくまで「東亜の長兄」としての日本なのであり、単独の日本ではないのである。同様に、台湾の場合も「東亜の子」であるので、蔡自身が示す台湾への愛情も単一民族偏愛の「ナショナリズム」ではなく共和政体の理想への献身という意味での「パトリオティズム」のかたちをとることになる⁽²⁵⁾。そう考えると、蔡にとっての「日華

(24) 蔡培火 (1937)、183頁。

(25) マウリツィオ・ヴィローリによれば、パトリオティズムはナショナリズムとは異なり、「国境を越える連帯へと変容し得るもの」だという。ヴィローリ、マウリツィオ (2007)、251頁を参照。

親善」とはつまり、そのような自らの「祖国」としての「東亜」の理想を実現するためには、けっして欠くことのできないものだったのではないだろうか。

おわりに

ここまで蔡培火の思想とその著書『東亜の子かく思ふ』について、いくつかの視点から検討を進めてきた。

結論としていえることは、まず蔡培火はキリスト教人道主義にもとづく自由と平等を愛する知識人だったということである。そして、その理想を実現すべく台湾においては総督府の専制支配と戦いつつ民衆の知育や、台湾人による自治を目指す台湾議会設置請願運動に尽力し、自らの理想を実現させようと努力してきたのである。そして、最終的にいき着いたところが、今回の『東亜の子かく思ふ』の中で展開される「東亜」や「日華親善」に関する蔡自身の構想であった。

本論第一章でも触れたように、蔡培火の政治思想の原点となったのは台湾同化会での活動である。この時日本側の代表を務めた板垣退助は、台湾を日中の掛け橋にしたいと考え、台湾人を介しての日中親善を切望した。結局、この時に台湾人に与えられた役割を、蔡培火は日本の敗戦までずっと果たし続けたのである。

今回とりあげた『東亜の子かく思ふ』が執筆されたのは、まさに日中全面戦争が勃発する前夜のことであった。その危機的状況の中で、蔡はまず自らの理想とする「東亜」という空間を構想し、そこに日本と中国を囲い込むことにより、何とか両国の正面衝突を回避しようと試みたのである。だが、結局はその努力もむなしく、両国は泥沼の戦闘を経て最後は日本の敗戦というかたちで終わった。それでも蔡培火は、日本側の協力者である田川大吉郎らとともに、最後の最後まで中国の要人と面会して談判するなどの和平工作に尽力したのである。この『東亜の子かく思ふ』は、そんな蔡の政治的理想や一宗教者としての信念が詰まった一冊であるといえる。

参考文献

- ヴィローリ, マウリツィオ (2007) 『パトリオティズムとナショナリズム——自由を守る祖国愛』佐藤瑠威・佐藤真喜子訳、日本経済評論社。
- 蔡培火 (1937) 『東亜の子かく思ふ』、岩波書店。
- 中島利郎 (2005) 『日本統治期台湾文学小事典』、緑蔭書房。
- 矢内原忠雄 (1929) 『帝国主義下の台湾』、岩波書店。復刻版 (1997)、南天書局。
- 吉田莊人 (1993) 『人物で見る台湾百年史』、東方書店。